

[講演要旨] 八戸地域における歴史災害と支援の実態

Historical disasters at Hachinohe area and actual situations of stricken area support.

弘前大学特別研究員* 白石 睦弥

§ 1. はじめに

先だって「新編八戸市史」近世資料編3冊が全て刊行された。しかし、八戸南部家文書には未整理資料も多く有り、既刊の「八戸市史」資料編近世10冊にも、八戸藩庁の日記類(『目付所日記』『勘定所日記』『用人所日記』)が抜粋されている。

このように膨大な資料の中から、八戸地域の歴史災害について、体系的に検討されたものは多く見られるわけではない。

本発表は近世八戸藩領において災害対応と支援がどのように行われてきたのかを明らかにするものである。

§ 2. 八戸藩について

八戸地域は鎌倉時代から八戸氏(根城南部氏)が支配していた。しかし、天正十八年(1590)、豊臣秀吉から南部信直が糠部七群を安堵されると、八戸氏は盛岡南部氏の家臣となり、寛永四年(1627)には遠野へ移封された。その後、盛岡藩の直轄地として代官所が置かれていた八戸に分離独立の契機がもたらされたのは寛文四年(1664)のことである。盛岡藩28代南部重直が跡継ぎを定めないうまま亡くなり、南部家は一旦御家断絶(無嗣断絶)の危機に直面した。その後、幕府の裁定は、重直の弟の隼人(重信)に8万石、同じく弟の数馬(直房)に2万石を分知というものであった。

この南部直房を初代藩主に据え、八戸藩は2万石の家格を有する大名として誕生する。

八戸藩の藩領域は飛び地の志和4村(岩手県紫波郡紫波町)を除くと、現在の青森県八戸市と岩手県久慈市、岩手県九戸郡のほぼ全域と青森県三戸郡の半分ほどである。東に太平洋に沿った長い海岸線と広大な山間地を有しており、2万石とし

ては大変広いものであったと言えよう。

さて、八戸が町として整備されたのは寛永七年(1630)のことと考えられ、表通りは正保年間(1644-47)、裏通りも慶安元年(1648)には完成しており、その後の八戸藩成立とともに、そのまま城下町として組み込まれた。現在もその町割りはおとんど変わっていない。

また、元禄八年(1695)から明治四年(1871)の間の各段階で城下(家中・町人など別)や領内の人口が、宗門改等の記録から明らかにされている。

§ 3. 八戸地域における災害

ここからは、以上の背景をもとに、寛文年間以降の八戸地域における災害について一覧する。地震津波の被災状況を中心に、洪水・大水、飢饉・凶作等についても検討する。

また、幕府への被害状況報告の内容を吟味するとともに、藩士を含めた領主権力側の対応と、民衆から見た災害の実態についても言及したい。

§ 4. おわりに

東日本大震災発災から弘前大学大学院地域社会研究科では八戸市で避難所調査を行ってきた。激甚被災地をとりまく地域に、辺縁被災地とでも言えるような地域が存在しており、避難・復興の流れに激甚被災地と異なる様相が見られたからである。3つの避難所で聞き取りを行ううちに、過去の大火や地震津波等の記憶・記録について語る人が見られ、地元で根付く災害文化や災害観は、経験はもとより、伝承を含めた歴史災害によって構成される部分が少なくないと考えた。

今後は歴史的背景が現在に及ぼす影響についても検討したい。

* 〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地 弘前大学大学院地域社会研究科
Mail: shiraw01#cc.hirosaki-u.ac.jp